

KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
LICENSED PRODUCT



正史
實傳
伊呂波文庫
四編
上

13
1807
10



十内とちうの妻つま貞女まことの
 瀬せとと瀬せのこ妻つまままの
 奉傳ほうでん五編ごへん小こ入いりり墓かぶ碑いの
 糸いと初はつ本ほん廻まわりま小こ今いま折おりりて
 世よのひとのしらる所ところあり
 十内妻 葉
 小野寺十内妻
 於葉



酒さけ店たなの町人ぢやうじん
 天川屋あまがわや
 理兵衛りべゑ
 俠客ぎやく
 義士ぎしの
 助すけ力ぢから
 后のち松まつ水みづ
 土ど倉くらと号
 東山とうざん
 用もち彦ひこ次つぐ
 後ご鑑かん録ろく
 ままやや子この
 赤穂あかほの浪人なみのり
 両りやう倉くら
 本ほん之の助すけ
 天川屋理兵衛
 赤穂の浪人
 両倉
 本之助



矢間光與と義士四十
 七代内一個の豪傑多
 親喜兵衛弟新六
 俱小三個金後の
 心を一致して早く
 東に下りて敵
 師直を祓ふに終小
 奉望を達せしむる
 爰小現甘圖を叔父
 喜内の病床小ゆき發
 足のいと病乞の体なり
 銭別とて十代の短刀と
 運ぶといひり



矢間
 喜内



後鑑録

女房の
 武士乃
 折枝
 十太郎妻

矢間
 重太郎
 光興



便とるひ
 列小かろう事れくろの
 理に伏し主人
 行重う安否
 問とま
 せんえの梅小
 入とる衣あつ
 くら香むといり
 義士う下僕不
 如切ち居あり香
 本傳小記せり

近松が僕
 甚三郎

近松
 行重



近松行重の義士同盟の一豪傑多り
 その下奴甚三郎の傳小姿さあは縷く
 敵地の業内奴さう粉骨細骨を勞さる
 上までも仇討の供小立てて
 権柄とてさ敵討の
 場所小水小換
 義士さ
 咽を潤ひ

歌好
 小露

小野九太夫 許定九郎ハ
 流浪者ト悪行ハやくまハある物
 同藩の浪人矢間喜兵衛小合カ
 以掛クハ依喜兵衛波号父子ガ
 奸悪小シテ人道を失るハ
 獸同前ル心成ト不便ハ
 其の僅の金子トシテセウ
 堀部中村の武士ト直ニ交
 大由ル定九郎トシテ
 後のいふありとてある
 殺中セトモトモ
 本願ハ見入ル



九太夫許
 小野の
 群平
 定九郎



矢間光延ハ
 江戸蒲生の
 疾流ハ
 武藝ニ
 通曉ハ
 犯スル
 事ハ
 多シ
 事ハ
 多シ
 事ハ
 多シ

矢間喜兵衛
 光延

小山田庄左門 下僕 直助 推兵衛
 屋敷 小
 父十五五
 の憤死
 遊女 妻
 後ハ
 俗面 家業 吞小
 兄庄左門 吐そく小
 討てて 義士 妻を

非道の金とうむ
 下僕直助庄左門
 庄作と殺害は
 於花とてさむく
 出奔る兄弟が
 不忠不孝不義の
 天罰 ころし死りか
 父重兵衛 猛勇 老衰
 多病 力のいわ 義士の
 俱不美名 奪ぎ 切て 甚と
 老如 斯臆 柄の 小却
 汚名を 強て 撲死 其罪の 小く

庄作妻 於花
 小山田 一蘭 庄作

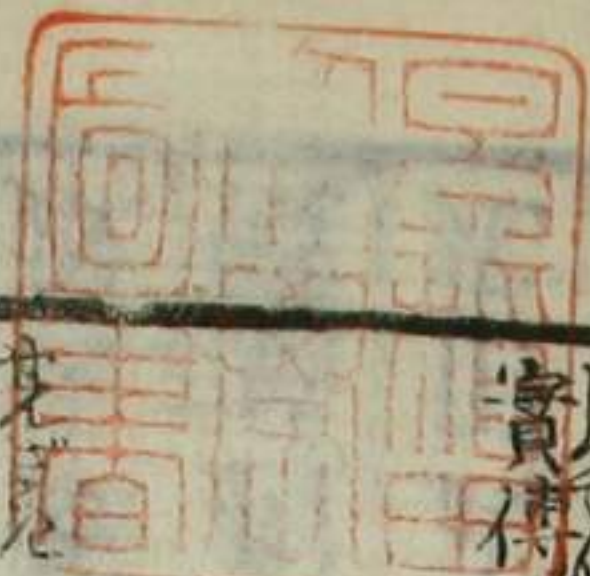
善中緒像
 五、泉画



小山田庄左門 下僕 直助 推兵衛
 屋敷 小
 父十五五
 の憤死
 遊女 妻
 後ハ
 俗面 家業 吞小
 兄庄左門 吐そく小
 討てて 義士 妻を

小山田下僕 直助 推兵衛





正史 實傳 いろは文庫卷之十

第十九回

江戸 狂訓亭主人著

千鶴 孫八郎 剛休の書鏡 せしといふ 懐は絶縁 自解とう
題号しる書よ白

奥野 務監ハ 逸義トシ 其家の祖より 山城守ハ
いふれ 武功を貴ハ 若きとも 行敗ヲ 鉄石公 勿シ 志氣の
ごとく 碎けテ 室一々 五段ハ 落ハ あり川村 傳兵衛 佐五郎



春の月
その月

春の月

春の月

伊右の進源四郎 小山源入右の偶と忠義と抱く
金石の如くとも 節を傳んで 其意を志す
雪霜の如くとも 節を傳んで 其意を志す

存の文をよみおかし 衆士の評せしごとく 載せれども 代り
本意の如く 本意の如く 衆士の評せしごとく 載せれども 代り
只引利の 青葱をわす 人小とそ 思ふの ころり さいは後の
世のいふて 先哲の 捨穿種く びきでま かく 格量の 説めて
そ願の 風情を 添くとも 知る 変難く べし 役大里氏の 仇

伊右の進源四郎 小山源入右の偶と忠義と抱く
金石の如くとも 節を傳んで 其意を志す
雪霜の如くとも 節を傳んで 其意を志す
存の文をよみおかし 衆士の評せしごとく 載せれども 代り
本意の如く 本意の如く 衆士の評せしごとく 載せれども 代り
只引利の 青葱をわす 人小とそ 思ふの ころり さいは後の
世のいふて 先哲の 捨穿種く びきでま かく 格量の 説めて
そ願の 風情を 添くとも 知る 変難く べし 役大里氏の 仇



ふさのりて外国の要ひ番一拾のてゆふ内を
渡して其ひとト山をよるべお滞の定ふ
多るば多は方へお通うを成ま一ト家内へ傳まひ入け
信希左の穴を中を遊かして早速扱えとさうおとゆ
お武家の法にて持載ま せよとていへるおあひ
け通う定紋を金糸眼のうらわの梅ゆか他人ふ拾はれ
直糸田節があらうと世図中へ和言獨されつるゆか密に
今ね尋ねておのりていさる 信五一ト大かの出酒機懸で

お老あし一歳すゝのておあまの 信一トお家一の通う
酔ふ正体さくおのていへるゆか併お図のひもいさる
は身より 信一ト一ト池田之右のさると當時の名号
少科の 信一トおあまの通うの身の上おあひ大星中
とやて千八百名の船を領して居るゆかお浪人の後を
おのて後のおを途中へおあひるゆかおのを言解され
先祖之海は同ト信人の古傍半お圖えてもとがり
おのをいさるゆかおのり入るト深く知れとて遠く

あまを縁とて... 出入せし元来三分の金...
と云ひ二三文字を... の徳を分て...
の者ども大星を... の酒食の...
氏もまた... 金銀... 持来し...
... 申ふ... 別... 体...
... 小山進... 小... 可...
... 押... 同... 苦... 空...
... 折...

古人の善悪忠不忠の... 是非の...
... 評... 悪... 善... 忠...
... 亦其人... 幸不幸...
... 夫主君を... 戦場...
... 勝... 忠... 多... 其...
... 悪... 難... 用... 最...
... 評判... 主... 家... 忠...
... 捨... 他人... 世... 勝...



清て清らうら若箇うは情を思ひあづる家小師直の
家老職小林平八事と国をく人の情も情く仁義の事
其忠にふるむ四十余の輩小勝り亦武勇力量も
亦かより大なり小勝りて魂魂をばむ村の人々と戦ひ死を
知原向せしとて國傳へ遠慮の余り野外傳の奇り
あつて依怙良員わぶる宿官の一覽小傳
○野末も當時は花柳のあつた春の縁あつたが住み街と
なり所東小傳はしるすまれば昔よりいふまゝに思は

人のまうりけり家小野中の井と呼らる谷中三崎の辺
あつて誠小林中の井戸ありてその伝小名と呼らるや
住昔柏木といふ遊女のありしがあつたりて男の小傳とて
友人ありしがけし所小名をうら庵を結んで二十二年とらるを
させしが了みとらるるありぬとて里人の名をさしりてその
傳小埋く権の木と植て墳墓のやとて車都監と
まてけるが何者も其車都監
りひとるま野中の水のくさまはつ

浦て跡なき珠が面影

其時植一檜の木は古木とありて今もあり瘡病を

頼ふ者その木のりも小舟にて立預まきか忽ち半愈

といふ彼の庵の侍の井戸も今もあり是を野中の

井と言傳ふト想庵子名所大合小記あり想庵子ハ元禄十
五年三月上木の
あけ

御本其流のち名所とあり野中の井戸秋も更流に

月影の水小うらも柏林一き井けふもよとて合

せ涙小むせぬ娘の風情側小自添ふ若き男も同じ

く洞子噴びつ互よ手と多と採る一統子井中へ飛入ると

せる折しも柏木塚の木蔭より走出る一個の武士忽ち

男女の帯背と採て後辺の方へ引留ける

異竹の根岸とあり小里小さき家の一掃ありけり生

植ぬる秋の葉花むのほゆへ咲かして風小散る蒼い

植をぬぐりて流る音や川の水小流の落花流水わのうら

如く自然の風雅を備へる奇麗小造り一庭ありき

當時は住人もありて茅が軒端の古び所へ一葉は生れり

つね 常小高蒲の常句の借由と疑りるは頃此宅小位心
人の程進き廊小在て松の位の全盛なりしか年重の敷
もさうありて久しく訓條する人と縁ゆゑを結ひ其人の
誠心を尽せたりしゆを身代とせしむる廓を出て直極
は所へ来りしは善くは伴へし男の位家より思ひのこねど
外防より新世帯小なりゆもむつごまの尚ほ八只
一人は自ら愛する淋しき人方もあく徒然なればたと
やく越方行末の度と案トトミか所為さき候ふ四辺

と蘇れ柱小掛し三味線ととて調子を合せ中音小囀ふ
一節ハ松の葉の替唄

日本提小あらま由くなもよら海もさん
まゐるかみりゆはの衣被板うらうさ妻
やかとぎに酒の跡る月のつが袖も下谷
うへの山づらうらゝる急路わがはらうる狗
おらうらるもさるをわらふるもさるけ
く水の

ト咽なげひくケーがんの中の不図りくもしる男の才の久し丈も
ぞと明かして告つねども我わ身みを靡せ出し頃より家業の
損し失し不都合の積りものわりもまるり業支不付ては元元
では笑まうる人が他見信飾りも捨り果ては所の住居もすべし
節考の笑一別莊さらに近頃俄に終家をに他人に
あがりてはらぬとうてすらふに任居高い店の本店も
今の高賣もままと思いしらぬ夏のとうらべには程日
毎日店の方へ行くと言う出行と懐中金ももしき其の

体の顔色のさえ見あらぬもをさらにぶれ身へ取りと際
まんの如何もうり悔しくもすと本言ふとと胸を痛め
て朝々小をを從へと在らんと苦界小ならず一輝の光
あらなき一つも若悪小則て苦勞をまらんらん既
小其日も黄昏て深山の本林に帰り行く群鳥の暮夜
も何ともく常後よりいいとと長き小園へは細き夏
いらん方き折くら帰る丈の足音もやもあらず走
里出竹の折戸を引あけく女子や今日の遅ふさぬし

と子工男式然ヨ用が不調く諸方歩行て進く自らと
ア亦今一を行きけさびらまひト言まがれ家内入
とら女房の方燈を出して火をとり雨戸をくわて
女入り今夜他所へ行のを止るは成す子へ竹ざり
今日狗さるまがーとり忠しくらるるくと先別々
獨て涙を落して泣て居まるとり男へ然る何故
どらふら大略は様々淋しい所へ来るとりのどらふら
の誓事情のしらふ不日店の方へでも行いぬか晴るす

女ハ立淋しいのも不自由もねまをうぬるひら何と
公算いお茶の顔色が悪ひうらふ葉ざられてるらふら
お茶指のね小隙して公配でお存ざらうと誠の苦勞で成
ませんヨ男ハナニ行も強くと居の有るひが誰人ぞお茶
お茶とらけ身の支を吐くてもーとの女ナニ種も
何とも言ひの付せんが子何指も相晩をを付て
家らふお茶指の多分苦勞があるお茶遠ひらひと思
ひまはら若も然るらるらその指お茶も明してはる

大星氏画

春水写之



るいんお金も何れも入りまはりのりしとて何れも所へお
 出のでも同体小連て終てお異を成ヨウト片身小男
 の裾を押し片身小封じり書物を取て口ゆて封じを
 破りしむるく開て讀みこれが男月亦それハア今うよ
 まふとも直夏よりナ後刻で志づく小讀が能叶う
 ハア相續まる所へ終て来るりくもト以どもなるく
 放るがよそ柔弱力も女の一念しちまら送書を送
 下し堂へ入つてさるるがナアコレ法候ナ私の持書し

と通り都合の悪ひのと直まふとお思ひで相場古
ざらふ後そ身上を果して世間一面目まひか
たへ對しても取うひら死んで仕すうふと覚悟
しうら其死て私ひ身の片付として果るとお言ひ
遣状直ぐお困らせまのとお思ひで別まるおふ
お金と命死れ残さお前様の情に却て恨まぬ
何程残しひ勤め果でも夫婦ふらつて其中
り死んぶら給方がるお他所へ縁付ふと聞て

きらく小身体をせまるものごとお思ひらる
然う申実なるお前ごとと思ひに苦勞を
後日のつりまて遣状の方まのいな又お前
人の了當中も金かゝらうふか身上を渡さ
ではまりあさんごら言甲斐のあひ男ごと
せうが餘り續くは命ては身お自ら心で
尽て思ひ限ら今後の覚悟お前ら
苦累を物とせらるも多しは後淋し

居さるゝ窓しるらふ梅しらふと窓しては身かみ
ひ方がすしてあらふとするを定めて残は空る金
も當所へ余程丹誠しつゝのさうらふ必ぎ榮て是ん
るさんふと言まて最ど嘘ひ入に体もろく後まら
まらり付てせ熱まけり

折此男女のな何る者ぞとらふ男の録
倉する本徳町で明石屋は次郎と呼らる
町人らの女子はそのまをまらるゝあねど

廊下名高き三浦屋の遊君は今浦と呼ら
ま一全盛なりしが本文小説くおとくの
昔趣しうの猶もろき体とろりゆけん懶て
は法舟と双浦は兩個とも秀群小やさを
りまらるゝ住居を出て三崎なる菩提所へ来
精く彼野中の井戸へ身と投はめて死え
とらふせしまり其母柏木塚の小産より走り
出て兩個の命と助けし高野家の英と男

